

クロフカは、歩き続けた。雨上がりの明るい田舎道を、ひたすら歩き続けた。

家の誰かに、否、人間に見つからないように……。

もう、決して戻らないと心に決めていた。

後ろ肢は全く動かず、ただ前肢だけで必死に歩みを進めた。引きずる後ろ肢は、やがて先が擦りむけて血がにじんだ。

全体重を支えて歩いている前肢も、疲れきって感覚がなくなってきていた。

もう、道もクロフカには見えてはいなかった。

ただ、光が自分の行く方向を指し示しているのを感じ、光に向かって休むことなく歩き続けた。

小さなたくさんの光が、雪のように舞い降りて、自分の体が光り輝き始めているのをクロフカは感じた。

そして、疲れきって意識が朦朧となり、いったいここが何処なのか、自分がいったい何処を歩いているのかすらも分からなくなった頃、

「 やあ…… 」

と、穏やかに声をかける者がいた。

クロフカは、はじめて立ち止まった。

ふらふらになって見上げると、目の前が明るくなり、前方にひとりの若者が立っていた。

「 ああ……あなたが…… 」
「 ようやく会えましたね 」

若者は穏やかに微笑んだ。何処かテオおじさんにも似た優しい笑顔だった。

「 やってきましたね 」
「 ああ…… 」

辺りは、白く明るい霧に包まれているみたいだった。

「 ずいぶん頑張りましたね…… 」
「 ああ…… 」

クロフカは、少し照れくさそうに小さく笑った。

「 もういいんですか？……遣り残したことは？ 」
「 ああ……もうすべて……。……疲れたよ…… 」
「 ここからは案内しますよ……少し休むといい…… 」
「 ああ、すまない…… 」

クロフカは息も絶え絶えに答えると、一步前に踏み出した。
中空にふわあつと落ちるように倒れこんで、それを支えた若者の腕にぐったりと体をあずけた。

「 長かった…… 」

そう言うか言わないうちに体中の力が抜け、ふう〜とひとつ大きく息を吐いた。

クロフカの口から小さな光の粒が、水の泡のように浮かび上がっては消えていった。

そして、白い若者に抱き上げられたクロフカは、首をガクツと落として動かなくなった。

「 今までよく頑張りましたね… 」

若者は静かにそう言うと、光に包まれたクロフカの体を抱えて、光の霧の中を歩き出した。

抱き上げられたクロフカの体からあふれた光の粒が、滴のようにほろほろとこぼれた。

しばらくして、クロフカは自分の名を呼んでいる声に気がついた。まるで夢から覚めたように目を開けると、白く明るい光の中だった。体の重さはまったく感じられなかった。痛みも苦しさもなくなっていた。

ふと足元をみると、眼の下には、懐かしい我が家の庭が広がり、ナーヤさんが庭と道とを行ったり来たりして、自分の名前を泣きながら大声で呼んでいるのが見えた。

「 ああ、ナーヤさん… 」

クロフカは近くまで降りてみたが、自分の姿は彼女には見えないらし

い。

「 ナーヤさんには、いいのかい？ 」

「 ……ああ、おばさんにことづけてきた……あ、やはりちょっと

いいかな…… 」

「 もちろん…… 」

クロフカは、庭のレモンの木に向かって鼻を鳴らしてから一声吠えた。そして、また体をぐったりと横たえながらつぶやいた。

「 気がつくかなあ……ナーヤさんにもほんとに世話になった……いろいろほんとに楽しかった…… 」

「 素敵な置き土産ですね…… 」

若者が優しく微笑んだ。

これまで実をつけることのなかったレモンの木に、小さな緑の実が実った。

「 もう少し眠るといい…… 」

「 すまない…… 」

「 いいさ、気にしないで…… 」

若者は微笑んだ。

「 さ、いきますよ 」

クロフカを抱いた若者は、光の中をぐんぐん高みに上がっていき、やがて見えなくなった。

田舎道を右往左往しながら、涙声で必死に愛犬を呼びかけるナーヤは、ついに二度と犬を見つけることは出来なかった。

泣きながら、ふと上を見上げると、雨上がりの空に大きな虹が架かっていた。

今まで見たこともないような、涙も忘れるほど美しい虹だった。

しばし息を吞んで見とれた。

「クロフカ……さよなら……」

自分の口から思わず出た言葉に、ナーヤははじめて、事の次第を理解した。

あらためて温かい涙があふれた。

後記

これからのお話は、夢の中の物語とと思ってください。

やがて、時がたって……。

此処は天国です。

天国には白く輝く街があり、魂たちが現世と同じように、穏やかに暮らしています。

その街の中の、とあるオフィスに中年の紳士がやってきました。

入り口の看板には「セントラル・オフィス」と書かれています。

そのゲートをくぐる紳士は、ふかふかの黒いセーターに、ツイードのジャケットという装いで、肩のあたりまであるふさふさした黒い毛は艶やかで、その首元にはチャコールグレーのモヘアのマフラーを巻いて後ろに長く垂らしています。

歩くたびにそのマフラーがユサユサと揺れます。

その紳士は、足が少々不自由なようで、片手にステッキを持っていきます。そのステッキの柄の部分は、犬の顔をかたどった銀で出来ていました。

天国のセントラルシティにある、このオフィスカウンター……。

ここでは、さまざまな申請や残してきた家族などに関する問い合わせや、やり残してきた事柄、これからの事柄なども扱われるのです。

「 あ、あの…… 」

カウンターに立つ口下手な中年紳士に、天使が話しかけてきました。

「 こんにちは、ご希望を伺いますよ 」

「 あの……。世話になった人に、何かひとつこの……したいと思うんだが…… 」

「 プレゼント、ですね 」

「 ああ、まあ……そうなんだ。 僕あ、このまんま、こっちへ来ち

まったもんで……」

天使は微笑んで頷きながら

「では、こちらへどうぞ」

紳士は、ふんわりした雲のソファのあるカウンターデスクに案内されました。

「こちらに手を載せてください」

カウンターのの上に、雲で縁どられた丸くて平たい水晶の画面が現れました。

その紳士が手袋を外して、その毛むくじやらの手を載せますと、一瞬光のすじが横に流れ、その手を読み取り、天使と紳士、二人の前にある雲の大きな画面に映像が映し出されました。

それはその紳士の生きていた当時のさまざまなエピソードの記録でした。

画面を見ながら、紳士のマフラーが時折、ゆさゆさと揺れます。

また、被っている帽子の脇から、フカフカした三角の耳がだんだん大きくなって立ってきました。

そうです。

その紳士は紛れもなくクロフカ、クロフカの魂だったのです。

ひと通り見終わってから、クロフカはしみじみと溜め息をつきました。

「幸せだったんですね……」

「ああ……まったく……」

「ご希望はどのようにしましょうか……」

「ふむ……」

「では……同じように犬を手配しましょうか？」

「そうさな……なるべく小ささいのがいいんだが……あんまり世話のかからない……なにせ、おばさん、一人になっちまったんで……」

頷きながら天使は、奥から大きな羊皮紙の台帳を持ってくると、ペー

ジをめくりはじめました。

また、例の水晶の画面に手をかざしますと、次々となにやらリストが現れてきました。

それらを台帳と交互に見ていた天使は

「 ああ、残念ですが、今はあいにく小さめのが、すぐには……」

「 そうか……いないか……」

「 うーん、猫はどうでしょう？」

クロフカは、ちよつとの間、ひじをついて考えてから

「 猫……ああ、いいね、任せたよ。……けど、とびきり氣立てのいいヤツにしてほしいんだ 」

「 お任せください 」

天使はにっこりしました。

ある朝、まだ夜が明けきららない頃、玄関先で鳴く仔猫の大声で、ナーヤさんは目が醒めました。

眠たい眼をこすりながら、時計を見ました。

二月二十八日、朝四時四十五分のことです。

仔猫の声はますます大きく響いています。

パジャマの上からカーディガンを羽織ったナーヤさんは玄関に向かい、脇の窓から扉の前を見て

「 あら！ 大変！ 」

ドアマットの上に、それはそれは小さな仔猫が一匹うずくまって鳴いていたのです。

寒い寒い朝です。

ナーヤさんは大慌てで玄関のドアを開けると、その黒っぽいキジトラの仔猫を抱き上げて、カーディガンの中にくるみこみました。

そして、そのまま、マーサおばさんの部屋へ……。

「かあさん！　ねえ、起きて！……見て見て！　仔猫が……仔猫がきたよ！」

完